九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

元代水墨人物画の研究 ： 画僧による作品を中心に

李, 宜蓁

https://hdl.handle.net/2324/7329380

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

KYUSHU UNIVERSITY

（様式６－２）

氏　　名	李　宜蓁
論　文　名	元代水墨人物画の研究 ―画僧による作品を中心に―
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　井手　誠之輔 副　査　九州大学　准教授　伊藤　拓真 副　査　九州大学　教授　静永　健 副　査　九州国立博物館　主任研究員　畑　靖紀

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、元の画僧による水墨人物画を主な研究対象としている。とりあげられた画僧は、雪菴（生没年不詳）、絶際永中（生没年不詳）、因陀羅（生没年不詳）、黙菴（？～約 1345）の 4 人であるが、画風と図像の比較材料とされた諸作例を含めると、元時代の水墨人物画の現存するほとんどの作例を網羅している。

第一章では、頭陀教の教主であった雪菴の自画自賛による「羅漢図冊」（静嘉堂文庫美術館）をとりあげ、江南禅林以外を教線の舞台とする頭陀教が、江南禅林で制作されてきた水墨人物画の伝統を活かしながらも、自らの教義と関係する達磨や弥勒の図像を重視するとともに、文人画にみられる書画一致の表現をも取り入れていることに注目し、画風や図像の選択に江南仏教界で隆盛を極めていた禅宗との競争意識や頭陀教信徒の士人化の動きを反映していることを明らかにしている。

第二章では、幻住派の中峰明本と活動を共にした絶際永中が描いたとされる 3 点の白衣観音図を分析し、自利と利他の二種類の白衣観音図が制作され、特に絶際の真筆で、高い髻という仏に共通する身体的特徴や坐して禅定する姿のクリーヴランド美術館本では、修行者のための自利的側面が、瓔珞や耳などの装飾や歩いて行道する姿の他の二幅には、救済教化を仰いで悟りに至る多数の文人のために観音の利他的側面が表象された可能性を指摘している。

第三章では、因陀羅筆「観音図」（東京・個人藏）を依頼者と着賛者が禅僧ではない事例として検討し、禅の画僧が、依頼者・着賛者の仏教信仰の立場の違いを担保しながらも、自らの禅の立場を重ねあわせるものとして、襤褸をまとった観音の特異な形姿や、観者の視線に相反する観音の視線の動きに注目し、祖師禅と如来禅の双方の立場が表象されているとする解釈を示している。

第四章では、入元した日本僧の黙菴をとりあげる。黙菴は、江南禅林を転々とし金剛幢下に属する了菴清欲を含む禅宗諸派の高僧に参禅したが、特に黙菴が金剛幢下に入った時期に描かれた「布袋図」（MOA 美術館）をとりあげて議論し、布袋和尚の本体とされる弥勒仏をあえて描かない点に、仏画を尊格と同等のものと看做すことのない金剛幢下の宗教的な理念を読み解いている。

各章では、いずれも画風と図像の分析ばかりでなく、画賛を熟読し、画僧が身を置いた教団や禅の立場、さらには作り手以外に作画に関係する依頼者や想定される観者の立場が検討され、作品の制作背景に干渉するさまざまなコンテクストを重層的に読み解く中で、新解釈が導き出されている。その点において、本論文が 1990 年代以降、特に日本の美術史研究において自覚されてきた方法にしたがっていることが了解され、この点は、本論文をこれまで規範となってきた 1970 年代の日本における先行研究と区別する独自性の証左となる。それぞれの画僧の検討では、詳細な年譜も示され、今後の研究に資するところが多い。

南宋との区別によって元時代の水墨人物画の新しい展開をより明示するためには、南宋画を含めた検討が必要とされ、また 14 世紀の元時代における水墨人物画と重なりあう時空で展開した多様な絵画との関係性の検証も望まれるが、今後の課題として取り組んでいただきたい。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）を授与されるのに十分な能力を持つことを認める。